

資 料

明治8年「妙儀山紀行」・「妙儀山採薬目録」について

里 見 哲 夫*

Tetsuo Satomi

はじめに

これまで妙義山の植物研究の歴史については里見(2017)で紹介してきた。2023年妙義山の名勝指定100周年に併せて下仁田町自然史館で妙義に関する企画展が開催された折の資料収集の段階で担当学芸員が、これまでの報告にない妙義の植物研究の調査の報告記録を見つけ、里見も拝見する機会を得た。

妙義山植物研究の始まりは、明治18(1875)年の信越本線松井田開通以降と考えていたが、今回の資料はそれより以前のものであり、また明治10(1877)年の東京大学植物学研究室発足以前でもあり、大きな発見である。よってここに全文を原文のまま紹介する。

明治8年発行

妙儀山紀行・妙儀山採薬目録について

本報告は、田中(1999)によると明治8(1865)年7月から8月中旬にかけて、内務省第六局博物局長田中芳男ら十数名が信州の自然調査を行った際の植物採集の記録『信州諸山採薬記』に付随するもので、信州の調査の帰途の道中で小森頼信・伊藤 譲が妙義山に訪れた記録である。本報告「信州諸山採薬記并栃木縣下蟲災之記・妙儀山採薬記」は東京国立博物館のデジタルライブラリーで、だれでも閲覧できる状態である。

妙儀山紀行

乙亥秋八月十又四日輕井澤ノ驛ヲ発シ
阪本驛ニ諸君ニ別レ妙儀山ニ赴ク山阿
寂寥手篠竹ヲ分ケ足溪川ヲ渡ル漸ク
妙儀村ニ達ス始テ疑フ身ハ桃原ノ洞ニ
遊カト茅屋参差トメ佛宇神宮林間ニ
亭々タリ勞ヲ一店ニ逸シ衣ヲ撰テ上ル半ナ
ラザルニ日西ニ没ス空ク反テ寒亭ニ宿ス是日
苦苣苔ヲ採リ茹シ食フ美ナリ村人名知
教ヘテ救荒ノ一助ト為ス
十五日早起シ上ル嶮巖ヲ履ミ蒙茸ヲ披
キ蟾蜍ノ背ニ踞シ土人蟾蜍岩ト云古木ノ蚪龍ニ
登リ鷓鴣ノ危巢ヲ攀シ幽谷ヲ俯瞰ス或ハ
断岩屏立シ浮石足ヲ止メ難シ嗚呼又
危シ予土人ニ問此山火山ニ似ズ何ソ浮
石ノ多キヤ土人曰ク先年浅間山焼崩ノ
時飛散セシモノナリ始メ信ス漸ク山頂ニ達ス
種数ノ躑躅トイハヒバ苦苣苔ノミモ信州諸山
ニ見ザルモノハレンゲシヨウマ イハザクラ等ナリ
薪歌ヲ吟ジ反リ降ル午後二時ナラントス又歩ヲ中ノ
岳ニ進ム山形愛スベシ路ヤ石門ノ下ヲ過ク仰
テ見レバ高峻タル数尋、内ニ三軍ヲ伏スベシ
細逕ヲ行ク数丁ニシテ達ス宅幽ニメ勢阻ナリ実ニ
隠者ノ盤旋スル所ナリ然レモ植物ノ人意
ヲ冷スモノナシ嗚呼其レ眞ニ奇ナキ邪其レ

2025年1月28日受付。2025年2月7日受理。

* 〒370-2623 群馬県甘楽郡下仁田町下小坂48

眞二奇中ヲ識ラザル邪還リ反テ妙儀村
ヲ出テ松井田驛ニ宿ス
十六日晨雞再ヒ鳴テ殘月没シ征馬嘶テ
松井田ノ驛ヲ發シタ二月ト共ニ鴻ノ巢ニ宿
是日歩スル三十余万
十七日鴻ノ巢ヲ發シ皇居ノ下ニ歸

（口語訳）

いつがいの秋八月十四日、軽井沢の駅を出発し、坂本駅で諸氏・皆と別れ、妙義山に行く。山のふもととはさびしく、篠竹を分け、谷川を渡り、しばらくして妙義山に來た。そこに着いて桃源郷に居るのかと思った。かやぶきの家がまばらに並び、神社仏閣が林間に高くそびえている。疲れを店で休めて、衣服をつけて上った。

半ばにいかないうち日が沈んだ。空しくもとてもさびしい宿に泊まった。この日はイワタバコを採って茹でて食べた。美味である。村人は知らなかった。教えてやり救荒の一助とした。

十五日早く起きて上る。険しい岩を踏み、乱れた草をかき分け、ひきがえるの背にこしかけ（地元ではひきがえるの岩と呼ばれている）竜のような古木を登り、ミソサザイの危ない巢に登り、奥深い谷を見おろした。あるところは岩が切り立って、軽石が足を止めにくい。何と危うい。私は地元の人に尋ねた。この山は火山のようでない。なぜ軽石が多いのか。地元の人が言うには、先年浅間山が噴火した時飛び散ったものです。そこで納得した。やっと山頂に達した。数種のツツジとイワヒバ、イワタバコばかりである。信州の山々では見られなかったものは、レンゲショウマ、イワザクラなどである。

薪とりの歌を口ずさんで戻って下りた。午後2時になるところだった。また中之岳に歩いて進む。山の形は好ましい、道は石門の下を通る。仰ぎ見ると何ひろもの高さで、内に大軍を納めることができる広さである。

細い道を数丁行くと着いた。家はかすかにして地形は厳しい。本当に隠者がめぐり歩く所だ。しかし植物を調べる人はいない。本当に珍しい植物がないのか。それとも珍しい植物を認識しないのだろう

か？引き返し戻って妙義村を出て松井田の駅に宿をとった。

十六日夜明けの鶏が再三鳴いて残月は沈み、旅の馬がいななき、松井田の駅を出発して、夕方月と共に鴻巢に宿泊した。

この日歩いたのは、三十万歩余り。

十七日鴻巢を出発して、皇居の下東京に帰った。

妙義山採薬目録

明治八年八月十五日

小森 頼信

科 名	種 名
毛 茛 科	センニンサウ、クサボタン、ヨキナグサ、カラマツサウ、モミヂカラマツ、キンポウゲ、クサレンゲ、オダマキ、トリカブト、キケンシヤウマ
木天蓼科	マタハビ
木 蘭 科	コブシ、フサマクラ、ピナンカツラ
防 己 科	ツマラフヂ、アケビ
伏牛花科	メギ、サンカヤウ
罌子粟科	ヤマブキサウ、クサノワウ、タケニグサ
十字花科	ハタザホ、ナツナ
堇 菜 科	エゾスミレ、スミレ、ツボスミレ、ヒメブキ
遠 志 科	ヒメハギ
石 竹 科	ナデシコ、ガンピ、ミハナグサ、ハコベ、ツメクサ
菩提樹科	カラスノゴマ
茶 科	ツバキ
松木膚科	マツノキハダ
金絲桃科	クサビヤウ、ヲトギリサウ
槭 樹 科	イタヤメイゲツ、トキハカイデ、モミヂ、チャウジヤノキ、イタギ、コンジノキ、チドリノキ
蕪患樹科	トチ、ミヤマハハソ
葡 萄 科	エビヅル、ヤマブドウ、サンカクサウ、ニシキツタ、ヤブカラシ
牻牛兒科	フウロサウ、アカヌマフウロ
鳳 仙 科	ツリフ子サウ、キツリフ子
酢漿草科	スイモノクサ、アカカタバミ
芸 香 科	マツカゼサウ、ミヤマシキミ
秦 椒 科	サンセウ
木本黄精 葉鉤吻科	ドクウツギ
衛 矛 科	ムメヅル、コクサキ、マユミ
省活油科	ミツバウツギ
鼠 李 科	クロムメモドキ、クマヤナギ

科 名	種 名
漆 樹 科	ヌルデ、ヤマウルシ、ウルシ、ツタウルシ
蛾形花科	コガ子バナ、ムマゴヤシ、シヤジクサウ、コマツナキ、フヂ、ケンケ、レンリサウ、クサ子ブ、ヤブハギ、ハギ、メドハギ、イヌハギ、ナンテンハギ、クズ、クラハ、子ムノキ
薔 薇 科	ウハミツザクラ、シモツケ、ナツユキサウ、キョウカノコ、クサシモツケ、ヤマブキ、ヤマトウシン、ヤブイチゴ、エヒカライチゴ、クマイチゴ、フユイチゴ、ダイコンサウ、ヘビイチゴ、ミツモト、キンミツヒキ、ワレモコウ、ノイバラ、ズミ
瓜 樹 科	ウリノキ
溲 疏 科	サツマウツギ、ウツギ
柳葉菜科	ヤナギラン、ミヤマタニタデ
蟻 塔 科	アリノタウ
葫 蘆 科	カラスウリ、ツルアマチヤ
馬齒莧科	スベリヒユ
景 天 科	キリンサウ、マルハノマン子ンサウ
蔦 科	スグリ
虎耳草科	チダケサシ、ヤグルマサウ、ユキノシタ、ダイモヂサウ、キクブキ、ツダヤクシ、子コノメ、ムメバチサウ、ヤマアヂサイ、タマアヂサイ、ゴトウヅル、ノリノキ
万 作 科	マンサク
繖形花科	チドメクサ、ヤマミツバ、カノツメサウ、シヤクナ、イブキバウフウ、スバカズリ
五 加 科	ウド、ウコギ、タラノキ、ヤツデ、キツタ、ハリギリ、イモノキ、トチバニンジン
山茱萸科	ツクバ子、ヤマバウシ、アヲキバ、ミツキ
忍 冬 科	ニハトコ、ガベ、サンダンカ、スヒカツラ、ヘウタンボク 大葉、ハコ子ウツギ、ツクバ子ウツギ
茜 草 科	ヘクソカツラ、アカ子、キヌタサウ
敗 醬 科	ヲミナヘシ、オトコメシ、白山ヲミナヘシ
山芹菜科	マツムシサウ、ナベナ
集成花科	フヂバカマ、フキ、ノブキ、シラヤマギク、トヤマノギク、ヨメナ、オグルマ、メナモミ、ノコギリサウ、オトコヨモギ、ヨモギ、イハヨモギ、チハコグサ、ヤブタバコ、ガンクビサウ、テウリヤウサウ、ヤブレガサ、タカラコウ、モミジサウ、カウモリサウ、ハンゴンサウ、ヨケラ、アザミ、ヤマボクチ、モミヂハグマ、ユウダチハグマ、バイカウハグマ、カシハハグマ、カウゾリナ、アキノハゲシ、タンポ、カセンサウ
桔 梗 科	ソバナ、ホタルブクロ、ヨウラクシヤジン、キハヤウ
苦苣苔科	イハナ
齊 墩 科	チサノキ
越 橘 科	スノキ、ナツハゼノ
石 南 科	リヤウブ、バイカツハヂ、ミツバツハヂ、コメツハヂ、ヤウラクツハヂ、トガクシツハヂ、イチヤクサウ、カサンジマツ

科 名	種 名
紫金牛科	ユキノキ
狗 骨 科	タゴ
龍 膽 科	リンタウ、タウヤク、ヨシノヅカ、ツルリンダウ
旋 花 科	ヒルガホ、子ナシカツラ
列 當 科	オホキヤルサウ
玄 参 科	サギゴケ、ミツホウツギ、クカイサウ、カハチサ、フジウツギ、ヒキヨモギ
唇形花科	アキチヤウジ、カントリサウ、ミヤマタウバナ、タムラサウ、ウツボクサ、ジャカウサウ
馬鞭草科	ヤブムラサキ、クサキ
旌節花科	イハザクラ、トラノオ、コナスビ
車 前 科	オホバコ
蓼 科	イロハサウ、クリンユキフデ、イタドリ、ミツヒキ
樟 科	ヤブニクケイ、アブラチャン、クロモヂ、ハタウコン
胡頹子科	グミ
馬兜鈴科	カモアフヒ
大 戟 科	ヲカタウダイ、アカメガシハ
蕁 麻 科	ミツ、イラクサ、イラクサ大葉、ムカゴイラクサ、アカソ、カナムグラ、カラハナサウ、ケヤキ
金粟蘭科	フタリシツカ
三白草科	ドクダミ
菜 萵 科	サルヤナギ、ヨメフリ、ナラ、クリ、ブナ、シデ、ハシバミ、シラカンバ、メハリノキ、ニツカウブシ
胡 桃 科	カハグルミ
花 筏 科	ハナイカダ
松 栢 科	子ツサシ、アスナロ、ヒノキ、スギ、ベボガヤ、イチイ、イチヤウノキ、カラマツ、モミ
薯 蕷 科	トコロ
土茯苓科	スバラン、アマドコロ、ナルコユリ、ユキザハ、サルトリイバラ
王 孫 科	ツクバ子、タチアフヒ
蘭 科	ウチヤウラン、モヂヅリ、カモメラン
鳶 尾 科	アヤメ
石 蒜 科	ナツズイセン
百 合 科	ハスレグサ、キスゲ、ギバウシ、ホトハギス、コオニユリ、ヤマユリ、クルマユリ、ウバユリ
藜 蘆 科	ノギラン、ハウチャクサウ、マイヅルサウ
鴨跖草科	バウシバナ
天南星科	ヤマコンニャク
莎 草 科	アブラガヤ、ナルコスゲ、オニスゲ
禾 本 科	ミノゴメ、メヒジハ、チバミザサ、チカラシハ、ナツノチヤシキ、クマザハ、ヤキバザサ、シバ
木 賊 科	スギナ
羊 齒 科	チチブノウラジロ、ホシダ、ワラビ、ウラボシ、ヒトツハ、ゼンマヒ

科 名	種 名
石 松 科	イハヒバ

乙亥秋八月十又五日
総計四百餘品目可不見不知幾何

分類は当時のエンゲレル氏による自然分類法によるものと推定され、分類方法やまた植物名などは現在とは異なる。そのため、現在自生している種類と比較するには注意が必要である。

謝 辞

下仁田町自然史館の学芸員 関谷友彦氏、長野市立博物館分館 戸隠地質化石館 中村千賀氏には、

本文献の情報提供並びに資料閲覧に関する便宜をはかっていただいた。また、本稿は2名の査読者、また下仁田町自然史館研究報告の編集者らによって大幅に改善された。以上の方々に厚く、御礼申し上げます。

文 献

- 里見哲夫（2017）妙義山植物研究のあゆみ。下仁田町自然史館研究報告，2，47-50。
田中義信（2009）田中芳男自筆『科埜行雜記』－解説と翻刻－。飯田市美術博物館研究紀要，19，31-67。
信州緒山採薬記 並 栃木縣下蟲災之記・妙義山採薬記。
東京国立歴史民俗博物館デジタルライブラリー（<https://webarchives.tnm.jp/dlib/detail/6037>，参照2025-01-18）